

## 能登半島地震の被害状況と課題 (関係機関発表・報道記事等により作成)

1月1日に石川県能登地方を震源とする地震が発生。気象庁は「令和6年能登半島地震」と命名した。現時点で振りかえりたい。

**規模** 発生/当日の午後4時10分/最大震度7/マグニチュード7.6/震源の深さ16キロ/震度7前後の約12分間に震度6弱、5強以上が計4回発生、以後4日朝までに6弱1回、5強7回、5弱8回を観測/現在も地震が継続している

**被害** 2/28現在死者242人(災害関連死14人)/安否不明者7人/(発災時)避難者約400か所 3万人以上/被害住宅(石川県)約78,000棟うち全壊2,500棟以上/火災17件(津波火災2件)/輪島の朝市周辺火災は約240棟焼失/死者の約7割が高齢者、多くが旺死・低体温症/液状化被害1万件以上/道路通行止め93区間/

**津波** 直後に津波注意報、2分後日本海側に津波警報、大津波警報の発表。/日本海側1分~12分で到達。1波輪島港、最大山形酒井市の80cm、遡上高では新潟上越市で最大5.8m、石川県能登町で4.7m

**特徴** 震源域/能登半島西方沖から佐渡島西方沖までの150km間の複数の活断層が関連/逆断層型/陸地に近く津波の到達時間が早い/海底・海岸線が沖方へ90kmにわたり最大隆起4m/数千年サイクルの「海成段丘」が判明/4年前の12月からM5.4~6.5の地震が繰り返し起きる/家屋倒壊、津波襲来、山地崩壊、市街大火、ライフライン壊滅、道路決壊で孤立集落が多発

**問題点と課題** ①被害想定の見直しが1997年以降されていなかった。②電源喪失・通信障害による情報発信の遮断で迅速な復旧を妨げた ③緊急車両ルートを通す「道路啓開計画」が策定されていないため救援活動が阻害された ④新耐震基準適用(1981年)以前に建てられた木造家屋が多かった ⑤避難者や被害者の8割近く高齢者、帰省家族もあり被害の把握に困難を極めた ⑥指定避難所265か所のうち3割87か所が開設できなかった。⑦備蓄の大半が1~2日で無くなり開設場所、備蓄量のあり方に問題を残す ⑧避難所及び避難生活のあり方の再検討 ⑨福祉避難所は建物破損などで受入れ困難となり(輪島市9か所中3か所)要検討課題 ⑩1か月後も4万戸の断水、インフラの復旧遅延に課題を残す ⑪液状化地域の対策を検討する必要がある  
地震発災から3か月が過ぎ、その他数々の問題点・課題点が浮き彫りになってきている。

今回の能登半島地震で判明した新たな課題に対し私たちは今一度、現在の地区防災計画の見直しを進める必要があると考える。

「海成段丘」とは：海岸に沿い広がる階段状の地形。海底の地殻変動による隆起や海面低下で陸地になり元の海底が平らな段丘面が海面から一段高くなること

【防災総合訓練の目的】 今回の訓練は大雨・台風等に伴う災害や直近に迫る南海トラフ巨大地震のような大規模災害に備え“避難所でのいのちをつなぐために自宅での安全確保、避難を可能とするために”市民の皆さんに実体験や体感を通して、いざ起きた際にいのちをつなぐ行動につなげることを目指す、訓練目的であった。(取材：広報M)

## 1月21日(日) 令和5年度芦屋市防災総合訓練実施



避難所プチ体験の様子



## いのちをつなぐために 今、考えよう避難先

芦屋市立体育館・青少年センター及び川西運動場で行われた。能登半島地震の発生や阪神淡路大震災の1・17の追悼のつどいの後でもあり、市民・関係者あわせて約1,300人が参加した。約8割近くの方が子ども連れで外国人や障がい者の方も参加。会場では避難所生活体験ミッション、非常食の試食、災害時の各種車両の同乗体験など多彩に繰り広げられ、私たち防災士の会のメンバーも防災倉庫の資機材取扱体験コーナーを担当。参加者に発電機の操作やリヤカー組立の助言活動を実施。来場者の方に聞いてみると次のような感想があった

- 避難所生活の大変さがつくづくわかった
- 防災への意識が高まり雨の中でも来て良かった
- 体験(避難所・非常食の試食など)したことを今後に生かしたい
- 土震づくりや防災ラリーが楽しかった

### ～～～旧三条校区地域自主防災総合訓練 雪まつり～～～

2月11日（日）に行われた標記の訓練を取材しました。旧三条校区は芦屋川以西、国道2号線以北の7自治会、2町会が毎年合同にて行われているものです。今回の訓練は自治会（自主防災会・防災士等）・地元消防団・警察・陸上自衛隊・県治山林道協会など関係者の協力のもと、お子さんからお年寄りまで約600人が参加され正午までの間、貴重な体験を通して防災意識の高揚に貢献した半日の開催でした。

訓練の開始は自治会ごとに参加者が、指定の集合場所へ午前9時に集まり、防災倉庫の資機材の確認・扱い方や避難所開設の説明を聞いたあと、それぞれが訓練会場の山手夢保育園全面道路前まで避難経路を確認しつつ集団避難訓練が実施されました。会場では新温泉町から運ばれてきた新雪を土嚢に見立てた土嚢づくりの体験、消火器の取扱い・AED講習会、放水訓練や煙体験、土石流発生の実演など数多くのイベントが開催されました。ブースラリー参加者には会場で杵つきしたお餅が入った豚汁の炊出しと試食を味わうコーナーも設けられました。旧三条地域は土砂災害警戒区域に指定されていることから土砂災害発生模型と3D映像装置による災害のしくみのコーナーでは参加者が熱心に学んでいる姿が見られました。また、普段体験できない放水訓練の実施が参加者の注目を浴びていました。



（取材：広報万谷）

**自分のいのちを守る準備はできていますか？ もしものときのあなたを守るのは、今のあなたです**

**作ってみよう「マイ避難カード」** 「ひょうご防災ネット」アプリより作成してみよう

### ～防災士の豆知識～ 今村明恒と言う人物像

この吾人こそ、関東大震災の発生予知を明言した人物であった

1900年代の地震学者である。氏は1870年鹿児島市に生まれ、東京帝国大学（現東京大学）の助教授だった1905年、関東大震災の予言問題に関連して50年以内に東京に大地震が起きるとセンセーショナルに予測し、大地震と火災に備えるべきと雑誌の記事で警告し、当時は社会問題となった。このことで、当時上司の大森房吉と対立。世情を動揺させる浮説と攻撃され、大森・今村論争を巻き起こすことになる。氏は「ほら吹きは今村」と中傷されたが、18年後の1923年の関東大震災が現実のものとなる。このときの進言が地震学者魂、精神訓としてのちに続く研究者の指標となる。地震の翌月にはのちの昭和天皇（当時は皇太子）に、この地震について進講したことが記録に残っている。その後、南海トラフ地震の観測所を自費で全国に作り運営し、今日の地震予知研究の確立に貢献し、その礎を築いてきたと言われている。いまでは防災・減災の必要性を強く訴えた先駆的な地震学者である（N・M）

### ミニ情報（近年の兵庫県の被害地震）

兵庫県域は地震の常襲地である。特に多くの被害が出した地震を紹介したい。

- ・1569年（M7.5） 慶長伏見地震（有馬高槻断層）
- ・1707年（M8.6） 宝永地震（南海トラフ）
- ・1916年（M6.1） 神戸地震（野島断層）
- ・1925年（M6.8） 北但馬地震（田結断層）
- ・1927年（M7.3） 丹後地震（山田断層）
- ・1946年（M8.0） 南海地震（南海トラフ）
- ・1952年（M6.7） 吉野地震（奈良県）
- ・1995年 M7.3 兵庫県南部地震（野島断層）

以上の如く1900年代では多くの地震に見舞われているが、2000年代に発災していないことに注目しておこう。地震は時を選ばない、忘れたころにやってくることを心得ましょう。明日かも知れない災害？！

### 《編集 COLUMN》

2024年3月1日現在会員数 106名

阪神・淡路大震災を契機に防災士制度が出来てから20年が経過（2003年制度認証）、すでに全国で26万人が取得している。地域をはじめ企業、施設などの防災リーダーとしての活躍が期待されているが、全国的に資格取得者が、具体的な活動にどう生かすべきか、何をなすべきか、に行きついていない人も少なくないと言われている。今後、防災の核になる得るスキルアップへの研鑽、防災士間の結集・連帯感を醸発するような活動が求められている。まさに当防災士の会の結成の原点と言えるだろう。立ち返って一人ひとりが地域住民の安全と安心を第一に、災害が起こっても微動だにしない体制づくりと気構えを追求していきたいものである。防災士の会もまだまだ脆弱であることは否めないし、努力を続けていきたい。芦屋防災の要としてより一歩前進の姿勢で持続した取り組みを進めることを惜しまない。（編集委員）

{会員の皆様へお願い} 広報紙に掲載する防災にかかる原稿等をご提供いただけませんか。